

「韓国の変貌と今後の推移」

株式会社現代経営技術研究所 上級主任研究員 大島和義

韓国経済の弱点は経済の実力と通貨の実力がマッチしていないところにある。97年には決済不可能になり、IMFの介入で98年にやっと立ち直った。荒療治であったため失業率はアップした。しかし回復のスピードは速い。

主要輸出品目も大きく変わり、2004年1月から11月の期間の統計によれば、半導体10.6%、無線通信機器10.5%、自動車10.2%、コンピュータ6.9%、船舶関連6.1%、石油化学製品3.9%と先進国に近い構造になった。主要輸入品目は、上記と同じ期間で原油13.3%、半導体10.8%、石油化学製品3.0%となっている。半導体は輸出と輸入の率がほぼ同じである。

韓国は半導体と自動車を戦略産業と位置付けて入る。半導体は輸出入とも、2001年の150億ドルから2004年の250億ドル弱へと大きく伸びている。韓国のGDPは2002年の5000億ドル弱から2004年の6700億ドルへとほぼ直線的に増えている。だが、2004年から懸念材料が出始めている。成長分野に関わっている人とそうでない人との差が大きく、個人破産も増えている。

第3四半期から成長率が4.6%になり、民間消費もマイナス基調、輸出は20%台から17%台へと減速、これに伴い若年層の就職難が深刻。この理由は大手企業の生産海外シフトによる国内空洞化と、これを埋める新産業が輩出してこないことにある。高機能部品、高機能材料を国内で調達出来ず全て日本からの輸入に頼っていること。輸出主導型の発展構造は今後とも生命線、そのために研究開発力の強化、加工産業・部品産業の内部取り込み、対内直接投資の呼び込み(特に日本)。経済の内外需の新たなバランスを図る。以上を達成する為に、FTA、特に日本・アジア市場の開拓をすすめる。

政府の政策をまとめると3項に集約できる。

電機、電子、自動車に対しての国家の戦略産業としての位置付け。

エネルギーおよび石油化学原料の戦略的拠点化を目指し、ロシア、中国、日本、中東をつなぐパイプライン構想を進める。

産業基盤整備、産業立地政策として高速鉄道と地域開発の連動、高速道路網の充実、港湾の好条件化、各種の優遇措置。これらは産業政策とリンクしてうまく機能しつつある。

技術の価値重視、加工技術、研究開発の領域「基礎に金をかけるという意識が薄い。技術の蓄積、品質に関する価値を経営者・ユーザーが認め、それを高めることに対しての要求が増せば投資するようになる」。下請け思想の打破、供給調達源流の重視の領域「主としてアッセンブリーでやっている企業でありながら、部品を供給してくれる上流産業を自分たちの下請け産業としか評価しない」。経営者の所有観、個人財産形成思考の打破の領域「個人資産の蓄積が第一で、事業として大きくしようと言う意思が少ない」。経営と労働との関係構築、問題の解決の領域「近代化しつつあるが、たとえば交代制をとっている企業でも番と番の間に故意にブランクを設け、それを残業で埋めている」。国家リスク、政治軍事問題の判断の領域「南北朝鮮の統一を意識してはいるが、当分、休戦状態のまま南北分断は続くだろう」。エリート層の人々に、権限を与え責任を明確にして管理を委譲しても問題はない。

生活面では消費をエンジョイし始めた。高層住宅、健康志向、生鮮食文化、安心安全高級化、ゴルフ、教養文化、海外旅行等を楽しんでいる。しかし、経済基盤がしっかりしていなければ何も出来ない。ここへ来て経済的基盤がある程度安定し、成長してきたので、次に目指すのは社会的成長である。新世代経営・新世代消費の担い手へ、物まねから主体的創造社会へ、文化の多様性を許容、世界的な視点からの自国の見直し・・・これらを支えるインターネット社会。ただ、ま

だ未成熟な経済状況下で、いきなりグローバル化の波にさらされることはかなりの負担がかかる。